

〔原著〕

## 小中学生における怒り反応の特徴

—両親の養育態度パターンに注目して—

筑波大学大学院人間総合科学研究科：藤原 健志

筑波大学大学院人間総合科学研究科：濱口 佳和

The characteristics of anger responses in children:  
From perspectives on parenting patterns

Takeshi Fujiwara and Yoshikazu Hamaguchi

### 問題と目的

怒りが喚起されるような場面で、その怒り感情をどのように表出あるいは制御するかについて、本邦においてもこれまで様々な尺度が開発され、種々の要因との関連が行われている（例えば木野，2000；大淵，1987；大竹・島井・曾我・宇津木・山崎・大芦・坂井・西・松島・島田・安藤，2000；鈴木・春木，1994など）。しかし、怒り反応のレパートリーは各尺度によって様々に規定されており、一様ではない。また、これらの多くは大学生や成人が対象である。海外の研究では、相手の悪口を言ったり相手を押ししたりたたいたりする小学生は仲間から拒否されやすいことが明らかになっている（Coie & Dodge, 1983）。このように、怒りや攻撃性が子どもの社会・心理的不適応と関連すると考えられるが、本邦においては児童期・思春期の児童・生徒に注目した研究は少ない。従って、小中学生の児童生徒において、怒り反応のレパートリーがどのような構造を持っているかについて明らかにするとともに、それら明らかになった反応レパートリーがどのような要因から規定されているのかについて検討することが必要である。

本研究では、この怒り反応に影響を与える要因として、養育者の養育態度を取り上げる。これまでの研究では、幼児において、子どもの報

復的な攻撃行動が権威主義的な養育態度と関連していること（中道・中澤，2003）や、拒否的態度と子どもの攻撃性が関連すると言われている（森下・庵田，2005）ことから、養育者の養育態度と子どもの攻撃性は関連があると考えられる。しかしながら、これらの研究は幼児を対象としたものであり、児童期・青年期初期を対象とした攻撃性と養育態度をめぐる研究は少ない。従って本研究では、小学校高学年から中学生の子ども自身が評定する、子ども自身の怒り反応と子どもの認知する養育者の養育態度に注目する。

養育態度と怒りを含む情動制御の関連を検討した研究は、これまでいくつか行なわれている（例えば、片山・馬場園，2004；蓬郷・中塚，1989など）。しかしながら、これらの研究は怒りを抱いた際の具体的な表現方法を区別していない。先に述べたとおり、怒り反応には様々なレパートリーが存在する。単に「怒りを経験するかどうか」だけではなく、「それをどのように処理し、表出するか」が健康にとってより重要な要因であり、これらの知見により介入目標が同定されやすくなる（渡辺・小玉，2004）。したがって、この種の研究が教育臨床的な介入法を構築する際の重要な示唆を与えることができると考えられる。

そして、本研究では女性養育者のみならず、男性養育者の養育態度を含めた両者の養育パ

ターンという観点から養育態度を取り扱う。従来、養育態度の研究では、Baumrind (1967) に代表されるように、母親を主たる研究対象とした母子関係における養育態度の影響が検討されてきた。しかしながら、母親のみに注目することは、家庭に占める父親の役割を無視してしまうことになる。近年、男女両方の養育者を含めて研究が行われるようになっており、男女養育者のそれぞれの独自の影響や養育スタイルの組み合わせが子どもに与える影響を検討した研究が散見される(例えば、菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999; 中道・中澤, 2003)。

そこで本研究では、男女養育者の養育態度の組み合わせにより、養育者の類型を特定し、男女両養育者の養育態度の取り合わせにより、子どもの仲間関係の葛藤場面での怒りの表出がどのように異なるのかについて検討する。

## 方 法

### 1. 調査対象者

茨城県内の小学4年生から6年生317名(男子170名, 女子147名)と中学1年生から3年生367名(男子183名, 女子177名)を対象とした。

### 2. 調査時期

2007年9月から10月に調査を行った。

### 3. 質問紙の構成

#### ①フェイスシート

「アンケートのおねがい」という題のもと、本調査が学校の成績とは関係ないこと、プライバシーが守られること、回答は任意であることなどを明記し、学年とクラス、性別を記入する欄を設けた。

#### ②怒り関連反応の測定

怒りを喚起させる場面(先生に提出すべきノートを、貸した友人から返してもらえない場面)を文章で提示し、その場面における反応について、先行研究(大淵, 1986や大竹ら, 2000など)を基に作成した尺度への回答を求めた。具体的には、「身体的攻撃」(「相手をたたく」、

「相手をける」など4項目)、「言語的攻撃」(「どなったり、大声を出す」、「目の前でわるぐちを言う」など3項目)、「攻撃転化」(「かべやゴミ箱などをける」、「ものを投げつけたり、こわしたりする」の2項目)、「言語的主張」(「怒っていることを相手に伝える」、「相手に理由を聞く」など4項目)、「抑制」(「だまって何も話さなくなる」、「その場から立ち去る」など3項目)の5因子15項目を設定した。各項目について、「とてもする(4点)」、「少しする(3点)」、「あまりしない(2点)」、「まったくしない(1点)」の4件法で尋ねた。

#### ③養育態度尺度

鈴木・松田・永田・上村(1985)の尺度のうち、「受容」(10項目)、「統制」(10項目)からそれぞれ3項目ずつ、計6項目を用いた。この尺度は元来養育者が自身の養育態度について回答する形式であったが、子どもが養育者のことについて回答できるように、質問項目を改訂した。各項目について、「たしかにそうだ(5点)」、「まあそうだ(4点)」、「どちらともいえない(3点)」、「あまりそうではない(2点)」、「まったくそうではない(1点)」の5件法で尋ねた。

### 4. 調査手続き

質問紙は各学級担任による一斉配布の形式で行われた。

## 結 果

### 1. 各尺度の検討

子どもの怒り反応尺度15項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、初期の固有値が1以上を満たす4つの因子が抽出された。そして、回転後の因子負荷量が.40に満たなかった項目6(「怒っていないふりをする」)を削除し、14項目について再度同じ手法で因子分析を行った結果、同様に4因子が抽出された。回転後の因子パターンをTable 1に示す。

第1因子は、「あなたをける」、「あなたをつ

Table 1 子ども怒り反応尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	$h^2$	平均	SD
<b>F1：身体的攻撃（<math>\alpha = .82</math>）</b>							
7. あなたをける。	.91	-.06	-.06	-.07	.74	1.29	0.66
11. あなたをつきとばす。	.84	-.06	-.05	-.02	.65	1.26	0.62
2. あなたをたたく。	.68	-.05	-.06	.11	.52	1.55	0.82
4. ものを投げつけたりこわしたりする。	.56	.04	.10	-.09	.31	1.20	0.53
12. どなったり、大声を出す。	.52	.19	.00	.07	.40	1.47	0.79
13. かべやごみ箱をける。	.51	-.01	.17	-.08	.27	1.20	0.56
<b>F2：言語的主張（<math>\alpha = .73</math>）</b>							
9. 自分がいやな気持ちになっていることをその友だちに伝える。	.05	.83	-.02	-.07	.66	2.44	1.14
14. 怒っていることをその友だちに伝える。	.02	.81	.01	-.01	.67	2.25	1.14
5. あなたに理由をきく。	-.12	.52	-.01	.06	.28	2.94	1.04
1. あやまってくれるよう、その友だちにたのむ。	.04	.41	.00	.07	.20	2.08	1.03
<b>F3：抑制的行動（<math>\alpha = .70</math>）</b>							
15. その場から立ち去る。	.02	-.03	.82	-.03	.66	1.77	1.00
10. たまって何も話さなくなる。	.04	.02	.64	.08	.45	1.93	1.05
<b>F4：言語的攻撃（<math>\alpha = .74</math>）</b>							
3. その友だちに、きつい言い方でもんくを言う。	.06	.02	.02	.97	.91	2.19	1.03
8. その友だちの目の前でわるぐちを言う。	.39	.01	.01	.42	.51	1.69	0.95
	因子間相関	F2	.22				
		F3	.17	.24			
		F4	.52	.35	.18		

尺度全体の  $\alpha = .79$

きとばす」などの身体的な攻撃行動を多く含む項目に高い正の因子負荷量がみられたため、「身体的攻撃」因子と命名された。第2因子は、「自分がいやな気持ちになっていることをその友だちに伝える」、「怒っていることをその友だちに伝える」などの主張的な怒りの表出に関連する項目において高い正の因子負荷量がみられたため、「言語的主張」因子と命名された。第3因子は、「その場から立ち去る」と「だまって何も話さなくなる」の2項目で高い正の因子負荷量がみられたため、「抑制的行動」と命名された。第4因子は、「その友だちにきつい言い方でもんくを言う」、「その友だちの目の前でわるぐちを言う」の2項目で高い正の因子負荷量がみられたため、「言語的攻撃」因子と命名された。各尺度の信頼性を確認するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、身体的攻撃（ $\alpha = .82$ ）、言語的主張（ $\alpha = .73$ ）、抑制的行動（ $\alpha = .70$ ）、言語的攻撃（ $\alpha = .74$ ）について、.70以上の値が得られ、十分な信頼性が確

かめられた。

養育態度尺度について、男女の養育者別に主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った（Table 2）。その結果、男女養育者双方において、「受容」と「統制」の2因子が抽出された。それぞれの $\alpha$ 係数は、受容因子（男性養育者： $\alpha = .79$ ；女性養育者： $\alpha = .73$ ）、統制因子（男性養育者： $\alpha = .62$ ；女性養育者： $\alpha = .68$ ）においておおむね高い値を示し、信頼性は確かめられた。

## 2. 男女養育者の養育態度についての組み合わせ

男女養育者（男性と女性）と養育態度（受容と統制）によって、家庭内においてどのような養育パターンが存在するかということを示すために、男女養育者の受容得点・統制得点をそれぞれの性別ごとに標準得点化し、この標準得点を用いてK-means法による男女別のクラスタ分析を行った。クラスタ数を3から6に設定して分析を行った結果（Table 3）、解釈可能性が

ら、男女ともに4クラスタ解が最も妥当であると判断した (Figure 1)。クラスタ構造が男女共にはほぼ同じ構造であったため、以後の分析では男女混合サンプルのクラスタ分析結果を用いた。

第1クラスタは、男女養育者の受容得点・統制得点が共に低いため、両親無関心群 (以下、

無関心群とする) と命名された (132名: 男子65名, 女子67名)。

第2クラスタは、男女養育者の統制得点が高く、一方で受容得点が男女養育者共に低かったため、両親統制群 (以下、統制態度群とする) と命名された (177名: 男子106名, 女子71名)。

第3クラスタは、男女養育者の受容得点が高

Table 2 養育態度尺度の因子分析表

	男性養育者					女性養育者				
	F1	F2	$h^2$	平均	SD	F1	F2	$h^2$	平均	SD
<b>F1: 受容 <math>\alpha = .79</math> (男性養育者), <math>.81</math> (女性養育者)</b>										
10. あなたがこわがっている時には安心させてくれる。	.84	-.04	.70	3.13	1.32	.77	.02	.60	3.42	1.33
1. あなたの悩みや心配なことをわかってくれる。	.74	.08	.58	3.26	1.25	.79	.04	.64	3.84	1.17
13. 家で、あなたと楽しい時間をすごす。	.69	-.06	.47	3.39	1.34	.72	-.07	.52	3.82	1.25
<b>F2: 統制 <math>\alpha = .62</math> (男性養育者), <math>.68</math> (女性養育者)</b>										
2. あなたに対してきまりをたくさん作り、きまりを守るように何度も注意する。	.00	.73	.53	2.64	1.35	.01	.72	.52	2.89	1.35
11. あなたのお行儀をよくするために、口うるさく注意する。	.10	.58	.36	2.91	1.38	.01	.62	.38	3.24	1.36
5. あなたが悪いことをしたら、いつも何かの罰が与えられる。	-.12	.49	.23	2.19	1.22	-.03	.60	.36	2.28	1.27
因子間相関 F2					F2					
.15					.10					

尺度全体の  $\alpha$ : 男性養育者:  $\alpha = .63$  女性養育者:  $\alpha = .64$

Table 3 3から6クラスター分類における各クラスターの最終クラスター中心、(N=683)

クラスター分類数	クラスター	受容得点		統制得点		N
		男性養育者	女性養育者	男性養育者	女性養育者	
3クラスター	I	0.59	0.59	-0.62	-0.65	223
	II	0.26	0.26	0.90	0.84	263
	III	-1.00	-1.01	-0.51	-0.38	197
4クラスター	I	-1.06	-1.19	-0.92	-0.63	132
	II	-0.54	-0.51	0.71	0.44	180
	III	0.57	0.60	-0.67	-0.70	208
	IV	0.74	0.76	0.81	0.92	163
5クラスター	I	-1.14	-1.43	-0.96	-0.74	101
	II	0.73	0.72	0.87	0.88	166
	III	0.80	0.69	-0.70	-0.83	157
	IV	-0.41	-0.03	-0.25	-0.03	172
	V	-0.68	-0.90	1.20	0.76	87
6クラスター	I	-0.20	-0.02	0.29	0.20	169
	II	0.91	0.81	0.91	1.01	129
	III	-0.85	-0.92	-0.82	-1.01	118
	IV	-0.92	-0.91	1.47	0.99	58
	V	-1.38	-1.58	-0.95	0.62	37
	VI	0.72	0.69	-0.70	-0.73	172

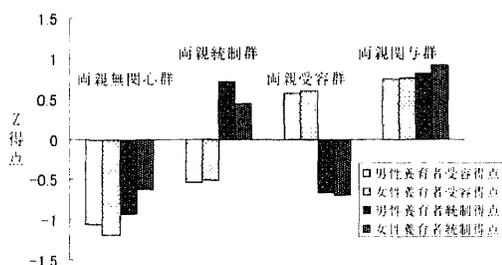


Figure 1 男女養育者の受容・統制得点別クラスターパターン

く、一方で統制得点が男女養育者共に低かったため、両親受容群（以下、受容群とする）と命名された（207名；男子89名，女子118名）。

第4クラスターは、男女養育者の受容得点も統制得点も高かったため、両親関与群（以下、関与群とする）と命名された（163名；男子95名，女子68名）。

### 3. 養育者の養育態度パターンと子どもの怒り反応の関連

クラスター分析によって作られた男女養育者の養育態度パターンにより、子どもの怒り反応がどのように異なるのかを、2要因分散分析により検討した（以下、多重比較についてはTukey法・5%水準）。その結果、身体的攻撃反応については養育態度パターンと性別に有意な主効果が見られた（ $F(3, 671)=8.724, p<.01$ ； $F(1, 671)=63.90, p<.01$ ）。多重比較の結果、養育態度パターンについては、統制態度群が他の3群に比べ、身体的攻撃反応得点が高かった。また性差については、男子の方が女子よりも得点が高かった。

言語的主張反応については養育態度パターンと性別に有意な主効果が見られた（ $F(3, 671)=18.87, p<.01$ ； $F(1, 671)=5.13, p<.05$ ）。養育態度パターンについては、関与群が他の3群に比べ最も得点が高かったほか、統制態度群が無関心群よりも得点が高かった（ともに5%水準）。また、女子のほうが男子に比べて高く、性差が認められた。

言語的攻撃反応については養育態度パターン

と性別に有意な主効果が見られた（養育態度パターン： $F(3, 671)=10.22, p<.01$ ；性別： $F(1, 671)=20.98, p<.01$ ）。養育態度パターンについては、統制態度群が他の3群に比べ、有意に身体的攻撃反応得点が高かった。また性差については、男子の方が女子よりも得点が高かった。

抑制的反応については養育態度パターンと性別の主効果が有意であった（養育態度パターン： $F(3, 671)=6.19, p<.01$ ；性別： $F(1, 671)=10.10, p<.01$ ）。養育態度パターンについては、統制態度群が他の3群に比べ、抑制的反応得点が高かった。また、男子よりも女子の方がより高い得点を示した。

## 考 察

本研究では、子どもの怒り反応を規定する要因として養育者の養育態度に注目し、男女養育者の養育態度の組み合わせとしてのパターンとの関連を検討した。

### 怒り反応の尺度構成

本研究で作成した怒り反応尺度を因子分析した結果、当初想定していた5つの因子のうち、4つの因子が抽出された。「攻撃転化」因子が「身体的攻撃」因子とひとつになったのは、「攻撃転化」因子の中で行われている実際の行動が、身体的攻撃を含むものであったためと考えられる。「攻撃転化」因子を独立したものとして定義するためには、項目数を増やしたり、項目の更なる吟味が必要であると考えられる。一方、そのほかの因子は先行研究と一致した結果が得られた。このことから、児童期・思春期の子どもについても大人と同様に、怒り場面においてこれらの反応が起こることが確かめられたといえよう。

また、言語的主張因子以外の3因子の項目においてフロア効果が現れている。これは、尺度の内容が攻撃や怒りの抑制といったより不適応な側面を反映していることに由来していると考えられる。得点が低いことがより望ましいが、フロア効果が現れないような工夫（例えば逆転

項目を採用するなど)が必要であり、本尺度の今後の検討点といえる。

#### 養育態度パターンの検討

両親の得点を用い、養育態度尺度をクラスタ分析した結果、4つのパターンが見出された。どのクラスタも、片方の養育者だけではなく、両親の受容・統制得点の高低によってクラスタパターンが決定されている。このことは、家庭において、両親が夫婦で一貫した養育態度をとっていることを反映している一方、子どもが個々の養育者ではなく、それらを包括した家庭の雰囲気としての養育態度を回答していると考えられる。いずれにしても、女性養育者のみならず男性養育者の養育態度を同時に測定し、類型化した検討はこれまでの先行研究で行われていなかった。この種の分析を用いた両親の養育態度研究を蓄積していくことで、今回の結果の妥当性を明らかにする必要がある。

#### 養育態度と怒り反応の関連について

この養育態度パターンと子どもの怒り反応を検討した結果、両親ともに統制的養育態度であることが、身体的攻撃あるいは言語的攻撃という、より攻撃的な怒り反応と関連していることが示された。この結果は、統制的養育態度を含む権威主義的養育態度群が統制的・受容的双方の態度を含む権威的養育態度群よりも攻撃的反応をより多く行ったという、幼児を対象とした中道・中澤(2003)の結果とも一致する。両親が普段から統制的に子どもに接するため、子どもの中にフラストレーションが蓄積し、怒り喚起場面においてより攻撃的な反応を行いやすいと考えられる。また、男子の方が攻撃的な反応を行いやすいという結果は、これまで多くの研究で明らかになっており(Krahe, 2001)、本研究でもこの性差が反映されたといえる。

主張的反応については、両親が受容と統制の両方の態度で子どもに接する関与群が、そのほかの群よりもより主張的な反応を行うということが示された。この結果は、統制的であると同時にコミュニケーションをよく行う権威的養育態度の下で子どもの有能さが最も高いというBaumrind(1967)の結果と一致する。しかし、

Baumrind(1967)は母子関係を重視した研究であり、今回の結果は、男性養育者を含めた両親の養育態度を検討し、先行研究と同じ結果が得られたという点で興味深い。また、性別の主効果が有意となり、男子よりも女子のほうが主張的反応得点が高かったことは、小学生を対象に、仲間による物理的侵害場面での応答的行動を検討した濱口(1992)の研究と矛盾する結果が得られた。岡安・島田・丹羽・森・矢富(1992)によれば、中学生男子よりも中学生女子の方が、学業成績をストレスラーとしてより高く評価している。本研究が、調査対象者に中学生を含めていることと、怒り喚起場面がノート提出場面という、学業成績に強く結びついている場面を用いたことで、これに敏感に反応する女子の主張反応がより高まったのではないかと考えられる。今後は、怒りを喚起する場面を学業場面以外に複数設定し、怒り反応に影響するその他の要因を統制する必要がある。

そして、攻撃的な反応と同様、両親が統制的に子どもに接することが、そうでない場合よりも、子どもの抑制的な怒り反応を高めることが明らかになった。家庭で養育者から規範遵守を強く求められている子どもは、それ以外の場面でもルールを守ることに強くこだわり、本来怒り感情の喚起が当然起こる場面においてもその表出が「いけないことである」と判断することによって、その表出が妨げられていることが考えられる。このように、規範意識が怒り表出行動を抑制するのは特に女子に特徴的である(日々野・湯川・小玉・吉田, 2000)ことから、本研究に現れた性差もこうした規範意識によるものではないかと考えられる。また、本研究では怒りを表出する相手を友人に設定し、怒り反応についての回答を求めた。女子は男子に比べて、仲間関係の維持を志向する友人関係を構築しやすい(Maccoby, 1990)ため、友人に対する怒りが喚起されてもそれを抑制すると考えられる。ただ、思春期の女子における怒りの抑制は主観的健康と負の関連がある(Yarcheski, Mahon & Yarcheski, 2002)ことから、より適切な怒りの表出法を学習し、怒り喚起場面におけ

るより適応的な対応ができるようなトレーニングが必要である。

### まとめと今後の課題

本研究では、男女養育者の日常的な態度が、怒り喚起場面における子どもの怒り反応に対してどのように関連するののかについて検討した。その結果、男女養育者が、共に統制的な態度で接する場合に、子どもの怒りが攻撃的あるいは抑制的といった、より不適切な形で表出されることが明らかになった。一方で同じ統制的であっても、受容的な態度を同時にとってれば、子どもは怒り喚起場面において自己の感じた怒りを相手に主張することができると考えられる。一方で、本研究で用いた怒りを喚起させる場面が1つであったことから、一部で先行研究と異なる結果が示された。今後は場面を複数設けるほか、文章以外での提示法なども検討する必要がある。

先行研究では、成人において怒りと身体的健康の関連について多くの検討がなされている。しかしながら、この点について、子どもを対象とした研究は見受けられない。今後は怒りによって引き起こされる身体的・心理的・社会的不適応について、より詳細に検討する必要がある。

### 引用文献

- Baumrind, D. (1967). Child care practices antecedent three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Coie, J.D. & Dodge, K.A. (1983). Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- 濱口佳和 (1992). 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動に関する研究 —仲間集団内での人気ならびに性の効果— 教育心理学研究, 40, 420-427.
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄

- (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因 —自己愛と規範の観点から— 心理学研究, 76, 417-425.
- 片山梓美・馬場園陽一 (2004). 児童期における対人関係の違いが情動表出に及ぼす影響について 高知大学教育学部研究報告, 64, 11-19.
- 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, 70(6), 494-502.
- Krahe, B. (2001). *The social psychology of aggression*. East Sussex, UK: Psychology Press. (秦一士・湯川進太郎 (編訳) (2004). 攻撃の心理学 北大路書房)
- Maccoby, E.E. (1990). Gender and relationships: a developmental account. *American Psychologist*, 45, 513-520.
- 森下正康・庵田菜甫 (2005). 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 15, 47-56.
- 中道主人・中澤潤 (2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 173-179.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 大淵憲一 (1987). 質問紙による怒りの反応の研究：攻撃反応の要因分析を中心に 実験社会心理学研究, 65, 127-136.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・宇津木成介・山崎勝之・大芦治・坂井明子・西信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人 (2000). 日本版 Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討 感情心理学研究, 7, 13-24.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・鳥悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子供の問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, 10, 32-45.
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985).

- 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす  
養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する  
測定尺度作成 愛知教育大学研究報告(教育  
科学編), **34**, 139-152.
- 鈴木平・春木豊(1994). 怒りと循環器系疾患の  
関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13.
- 蓬郷さなえ・中塚善次郎(1989). 家庭における  
父母の養育態度と子供の情動表出行動 鳴門  
教育大学学校教育研究センター紀要, **3**, 47-  
54.
- 渡辺俊太郎・小玉正博(2004). 怒りと健康に関  
する研究の動向と今後の課題 筑波大学心理  
学研究, **27**, 83-97.
- Yarcheski, A., Mahon, N.E. & Yarcheski, T.J.  
(2002). Anger in early adolescent boys and  
girls with health manifestations. *Nursing Re-  
search*, **51**, 229-236.